

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 2 年 6 月 5 日現在

機関番号：12101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K04841

研究課題名(和文) 教師・生徒の言説分析による高等学校討議型道徳授業の理論構築と授業開発

研究課題名(英文) Theory construction and class development of the high school discussion type morality class by the verbal explanation analysis of a teacher and the student

研究代表者

小川 哲哉 (ogawa, tetsuya)

茨城大学・教育学部・教授

研究者番号：80194439

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、優れた高校道徳授業を行っている茨城県で、道徳授業における教師・生徒の言説分析を行い、その結果から討議型道徳授業の改善と動画教材開発を行った。

動画教材「みんなの桜の木」は、討議型道徳授業のモデル教材となる教材であり、実際の道徳授業でその教育的効果が検証された。さらに動画教材と活字教材を比較・検討した。その結果、多くの生徒は動画教材が分かりやすいと答えたが、一部の生徒は動画教材に対して否定的評価をした。彼らに対しては、担任によるインタビュー調査を行った。その結果、生徒たちは動画教材に興味を示しながらも、活字教材の方が想像力を上げられる点の評価していることが分かった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

茨城県の高校道徳授業は、その規模や広がりの中で全国的に最も優れた教育実践の事例と見なされる。中でも高校2年生向けの「道徳プラス」では、討議型道徳授業と協働型道徳授業を展開している。

本研究は、茨城県の教師・生徒に道徳授業における言説分析を行い、討議型道徳授業の授業改善と教材開発を行ったものである。特に教材開発では、教育現場にまだ十分に普及していない動画教材を開発し、その教育的有効性を確認し、動画教材の可能性と課題を明らかにした。

研究成果の概要(英文)：In Ibaraki that performed superior high school moral education, I analyzed the verbal explanation of a teacher and the student in the morality class. In this study, developed improvement and the video teaching materials of the discussion type morality class. Therefore the video teaching materials made "the cherry tree of all" and inspected the educational effect by the morality class. Furthermore, I performed the comparison of the video teaching materials and the printing type teaching materials. As a result, many students replied that the video teaching materials were plain. But some students replied that the printing type teaching materials be easy to understand. I investigated the interview by the class teacher for them. According to the study method of the Hermeneutik, they evaluated the point where imagination was opened by the printing type teaching materials.

研究分野：道徳教育学

キーワード：高校道徳 言説分析 討議型道徳授業 解釈学的アプローチ 動画教材 活字教材

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

高校道德にとって注目すべきなのは茨城県の教育実践である。同県では、全国に先駆け平成 19 年度から全ての県立高校の 1 年生に道德の授業を 1 単位(35 単位時間)必修化させ、名称を「道德」(テキスト『ともに歩む - 今を、そして未来へ - 』(茨城県教育委員会：2006))とし教育課程に位置づけていたが、平成 28 年度からは高校道德をさらに 2 年生にも拡大し、ホームルーム活動として年間 10 時間の討議型道德教育(「道德プラス」(茨城県教育委員会：2016))を実施している。こうした取り組みと類似したものとしては、平成 22 年度に埼玉県で道德教材を活用した学習を年間 5 回以上実施し、千葉県では平成 25 年度から高校 1 年生に特別活動の時間と総合的な学習の時間等との連携による道德授業を実施していた。東京都でも平成 25 年度に教育振興基本計画として策定された「東京都教育ビジョン(第 3 次)」に基づき、道德教育の充実のための「道德・奉仕(仮称)」活動を一般に広く普及させる教材が活用されている。

しかし、全国的に見れば高校に特設の道德授業を導入する動きはその後も広がってはならず、その実践事例の研究についても極端に少ない。先行研究としては兼松(兼松：2007)や西野(西野：2012)の研究があるが、それらの研究においても高校における道德授業の必要性を指摘しているもののいずれも提言に留まっており、実際のプログラム開発には至っていない。その点で、高校の道德教育に関する教育実践の試みとしては、茨城県が突出していたといえる。このような学術的・実践的な背景から、本研究の目的は以下のように設定された。

2. 研究の目的

周知のごとく小・中学校の特別の教科道德では「考え、議論する」道德教育、中でも「合意形成」を目指した討議型道德教育の導入が検討されているが、近年、高校においても道德及び討議型授業の必要性が指摘されている。本研究では、全国に先駆けて平成 19 年に高校 1 年生の道德授業を必修化し、さらに平成 28 年度からは高校 2 年生で討議型道德授業を導入し始めた茨城県の実践に基づき、特別活動と連携した討議型道德授業の理論構築と授業開発を図る、討議型道德授業を有効に行うために動画教材を活用した授業実践の可能性を論究することを目的に研究を行う。本研究では、量的研究に加え質的研究を取り入れ、高校における討議型道德教育の授業理論と授業方法のモデルを構築し、全国の高校での討議型道德授業の展開を促進する。

3. 研究の方法

平成 29 年度は、これまでの討議型道德プログラムの再検討を行い、新たなプログラムを再構築し、特定の高校のホームルーム活動で実践し、量的分析だけでなく、質的分析である「解釈的アプローチ」に基づいて新しい授業方法論を確立し、動画教材を試作する。平成 30 年度は、実践する対象高校を拡大し、引き続き量的・質的分析を継続する。動画教材を使った討議型道德授業を対象校で行い、その効果を分析し、動画教材の改訂とさらに複数の教材も作成する。平成 31 年度は、過去 2 年間の研究成果に基づいて討議型道德授業の理論構築を行い、それによる新しい道德授業プログラムを、教員養成課程の学生と茨城県の県立高校の教員に対して実施し、授業方法のモデルを確立する。これらの研究成果は学会発表・研究論文や報告書を通して広く公開する。

4. 研究成果

本研究では、高等学校(以下、高校)の道德教育の実践が全国的に最も進んでいる茨城県を研究対象にして教師・生徒の言説分析を行い、その結果に基づいて討議型道德授業の方法と教材開発を行った。特に ICT 機器と動画教材を活用した新たな教育方法の開発は本研究において重要な研究テーマであった。

まず最初に ICT 機器(タブレット端末)を活用した協働学習方法の実践的論究を茨城大学の

1年生の教養科目「討議活動によるアクティブ・ラーニングの実践」において行った。この科目では、タブレット端末の動画アプリを活用して現代の社会問題を取り上げた報道番組をグループによる協働活動で作成させ、プレゼンテーションさせた。さらにこうした協働活動を県立高校（A高校、B高校：両校とも進学校である）においても実施し、その教育的効果を検証した。

次に茨城県の県立高校2年生の必修科目「道徳プラス」の動画教材の開発を行った。討議型道徳授業のモデル教材「みんなの桜の木」(小川：2018)は、道徳プラスの授業で使用することを想定して作成したものである。同教材は活字教材だけではなく、以下のように動画教材も作成した。

(1)「みんなの桜の木」の動画化

「みんなの桜の木」の映像教材化を単なる映像だけの動画ではなく、PowerPointを活用し、画像と文字を組み合わせたデジタル紙芝居風の「フォトムービー」形式の資料作成を試みた(2019年7月27日にYou Tubeにアップロードした)。それが以下の図1～6である。

図1



図2



図3



図4



図 5

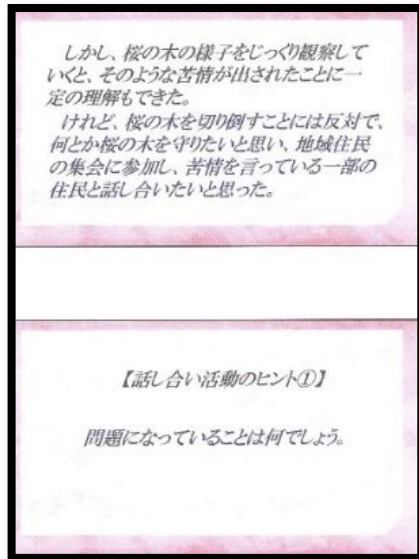
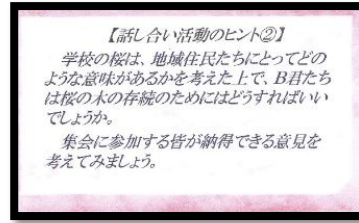


図 6



この教材「みんなの桜の木」の活字版と動画版を、実際に県立 A 高校の道徳プラスの授業で使用して頂き、生徒にアンケート調査を実施し、js-STAR による直接確率計算(1×2)による量的分析を行い、その教育的有効性を確認した。こうした一連の研究の成果は、小川哲哉・高橋麻理・長島利行「高校道徳における動画教材開発に関する研究」日本教育メディア学会研究委員会編『日本教育メディア学会研究会論集』(2019年7月6日 Web 掲載、1~6頁)に掲載されている。また、この授業では質的分析として生徒たちの言説分析も行っている。具体的な分析手法としては、動画教材に対して否定的な評価を行った 2 名の生徒に対して授業担当の教員によるインタビュー調査を実施した。彼らの言説の解釈的アプローチの結果では、生徒たちは動画教材に興味を示しながらも、活字教材の方が想像力を広げられる点を評価していることが分かった。

さらにこの動画教材を使って、茨城県道徳教育推進教師向けのセミナーでは全県立高校の教員 100 名に模擬授業を行い、教育現場の高校教員の印象と評価をアンケート調査で明らかにした。その結果、多くの教員たちが動画教材の教育的効果に期待していることが統計的検定で明らかになったが、自由記述には、動画における文字と絵とのバランスや、文字や音声ナレーションの必要性等の意見も出された。これと同じような指摘は、先述した A 高校の生徒たちからも出されており、動画教材作成の重要な課題として認識された。以上の研究成果は、小川哲哉「高等学校の討議型道徳授業の理論と実践に関する研究 - 動画教材の教育的意義について - 」(全学教職センター編『茨城大学教育実践研究』第 38 号、2019 年 11 月)に掲載している。

(2) 結語的考察及び今後の課題

従来から指摘されているように、活字教材を使って討議型の話し合い活動を行う際の問題点は、教材が持っている道徳的価値の対立構造や、登場人物らの関係性がすぐに理解できない場合があることだ。授業を行う時には、活字による教材理解が容易に行えない生徒が少なからず存在する。

こうした問題を解消するための一方法として有効だと考えられるのが動画教材である。本研究では、フォトムービー形式の動画教材を作成して、その教育的効果を検証したが、結果としては生徒対象の調査だけでなく、教員対象の調査でも動画教材に対しては概ね良い印象が多かったように思う。また、活字教材とは違い、動画教材の方が内容の理解を容易にするとの感想も

多かった。

一方で、改善策については既に指摘したように様々な意見が示された。まず、絵の部分と活字の部分とを分離したことについては、好意的な意見が多かったものの、細かいところを敢えて描かなかった絵については、生徒個々人のイメージを膨らませるという意図がよく伝わっていない意見もあった。むしろより細部を鮮明にすべきとの意見や、実写や写真等の具体的な映像による教材を求める意見もあった点には注意したい。さらに活字の部分の分量が多いことや、漢字にルビをふる必要があるとの意見も何件もあった。個々の高校の学力レベルの違いもあり、今後は教材作成する際の根本的な問題として再考する必要があるだろう。

さらに、今回の教員の調査で注目すべき点は、「音声」や「ナレーション」も必要ではないかとの意見である。このような意見はかなり多く、特に活字の部分に表示の際に、音声による朗読を求める指摘もあった。本動画教材の作成に当たっては、細部を敢えて描かない絵や、文字画面でも映すだけにして、生徒のイマジネーションの幅を広げさせる意図があったのだが、そのような意図が、逆に文字理解が十分にできない生徒たちにはかえってネックになったのかもしれない。

「画像と文字を同時に出し、紙芝居風にする」との指摘や、絵本のような作画に対する評価は、生徒たちへのインタビュー調査でも指摘されており、生徒と教員の双方に共通する認識があった点が興味深い。このような指摘を受けて、一画面の中に「絵」と「文字」を別々に表記し、いわば絵本や漫画のような描き方をすること、さらにそれに音声ナレーションを入れた教材を作成すれば内容理解がさらに容易になると考えられる。

以上の諸点については、今後の動画教材作成の課題として受け止めたい。

< 引用文献 >

茨城県教育委員会、ともに歩む - 今を、そして未来へ -、2006

茨城県教育委員会、高校2年生の道徳プラス、2016

小川哲哉、主体的・対話的な<学び>の理論と実践 - 「自律」と「自立」を目指す教育 -、青簡舎、2018、92

兼松儀郎、高等学校における道徳教育の実践的課題 - 研究開発学校の取組を中心として -、道徳教育方法研究、第12号、2007

西野真由美、高等学校におけるキャリア教育と道徳教育 - 総合的アプローチの可能性 -、名古屋大学研究紀要、2012

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 小川哲哉・石井純一・長島利行・渡邊哲郎・宮本夏海	4. 巻 37
2. 論文標題 教科横断的な教育活動による道德実践に関する研究－茨城県高校道德の事例を中心に－	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 茨城大学教育実践研究	6. 最初と最後の頁 303 - 314
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 小川哲哉・石井純一・長島利行・渡邊哲郎・宮本夏海
2. 発表標題 各教科等との横断的な教育活動を考慮した高校道德の実践
3. 学会等名 日本道德教育方法学会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 小川哲哉	4. 発行年 2018年
2. 出版社 青簡舎	5. 総ページ数 214
3. 書名 主体的・対話的な<学び>の理論と実践 - 「自律」と「自律」を目指す教育 -	

1. 著者名 坂越正樹、丸山恭二、山名淳、小川哲哉、杉山精一、松村納央子、諏訪佳代、衛藤吉則、松原岳行、岡谷英明、渡邊隆信、田中崇教、高谷亜由子、櫻井佳樹、大関達也、野平慎二、矢野博史、藤川信夫、矢野佐矢子、寺岡聖豪、鈴木篤、平田仁胤、杉田浩崇、上地完治、小林万里子、時津啓、白銀夏樹、丸橋静香、塩津英樹	4. 発行年 2019年
2. 出版社 東信堂	5. 総ページ数 286
3. 書名 教育的関係の解釈学	

1. 著者名 茨城大学教育学部学校教育教室	4. 発行年 2018年
2. 出版社 福村出版	5. 総ページ数 154
3. 書名 教育の最新事情と研究の最前線	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	柴原 宏一 (sibahara kouich) (80781715)	茨城大学・教育学部・教授 (12101)	平成29年11月1日付で、茨城県教育委員会教育長に就任するため、茨城大学を退職したため削除